



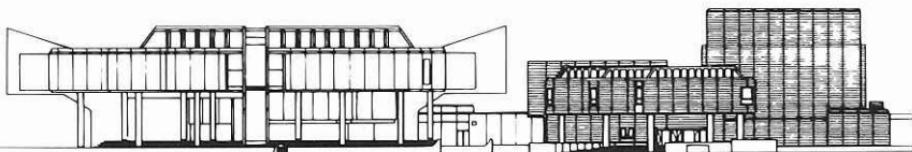
鏡頭莊図 寄託 江戸時代

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

1 October 1998

No. 121



研究ノート

かんいそう
観頤荘について

はじめに

佐賀藩三代藩主・鍋島綱茂の時代に觀頤荘と称する別邸（西屋敷）がつくられたことはよく知られている。觀頤荘内には聖堂（鬼丸聖堂）が建てられ、弘化3年（1846）に弘道館内に移されるまで、長きに渡って佐賀藩の学問の中心であった。しかしこの觀頤荘については、今は残っていないこともあって、詳細は不明である。わずかに「觀頤荘図」（鍋島報效会蔵、表紙参照）が当時の姿を伝えてくれるのみである。

本稿では、この不明な点が多い觀頤荘について、歴代の藩主の年譜や、各年代の「御城下絵図」、また現代の住居地図などを手がかりに、その位置や規模などを考察し、いくらかでもその実態に迫りたいと考えるものである。

1. 鍋島綱茂と觀頤荘

綱茂は歴代の藩主の中でも特に学問を好み、また書画にも秀でた人物として知られている。

觀頤荘の中心は聖堂であるが、「觀頤荘図」を見ると、荘内には築山や滝、池、流川などが巡らされ、漣曳檻、雲捧楼などと称された各施設や茶店、動物小屋なども設けられ、かなり広大な別荘であることが分かる。綱茂がいつごろからこの觀頤荘を計画したかは定かではない。実際に動きだすのは、先代光茂の隠居をうけて、藩主として家督を継いだ元禄9年（1696）以降のことである。

『綱茂公御年譜』（佐賀県近世資料第一編第三巻、1995年）によると、元禄11年（1698）11月の条に「今年、西御屋敷取立被仰出」として、西屋敷すなわち觀頤荘の建設が始まり、同13年（1700）に完成し、同12月27日に「西御屋敷内へ聖像四配并御祭器・御書庫・御門額共引移サル」として、二の丸聖堂にあった聖像などを移転させたことが記されている。

元禄15年（1702）に綱茂自らが記した『觀頤荘記』（佐賀県教育五十年史、1927年）には、「城郭の西に別居を構え觀頤荘と号す。易のいわゆる觀頤の義を取り、伝えて推養の義という。大いに天地万物を養育するに至る。聖人賢を養

い以て万民に及ぼす。人の養生養形養人とともに皆頤養の道なり。是そのよる所にして是その養う所なり（原文は漢文）」と建設の趣旨を述べている。なお『觀頤荘記』はかなりの長文で、前述した漣曳檻、雲捧楼、漱玉窓、代璋弄などの各施設の名称の由来を書き連ねるが、ここでは詳述は控える。

2. 「觀頤荘図」と「御城下絵図」

觀頤荘は現在のどの場所にあったのであろうか。「觀頤荘図」の図中には先の漣曳檻などの各施設の書込みがあり、それぞれの位置関係が分かる。さらに「境外」として画面左端に「宝琳院」（鬼丸町）が、その右上に「王子権現」（本庄町本庄、瑞應寺の東隣で現在は王子神社と呼ばれる）、「大井権村」の書込みがある。このことから「觀頤荘図」は北から南に向かって眺めた景観が描かれたもので、觀頤荘は現在の鬼丸町から佐賀大学の一带に東西に広がっていたと推定される。

また各年代の「御城下絵図」と比較してみると、「承応三年（1654）佐嘉城廻之絵図」では、当然のことであるが整然とした武家屋敷が描かれているのみである。（ちなみに現在の佐賀大学の付近は城下の外として描かれていない。これはその後の「御城下絵図」でも同様である。）

そのつぎの元文五年（1740）の「御城下絵図」を見てみると、宝琳院の北側に「聖堂」が描かれているのみで、その周りは武家屋敷に戻って



図-1 観頤荘の推定場所

おり、東に不規則な水路と大きな池ができている。このことは文化年間（1804～17）の「御城下絵図」でも基本的には違はない。それでは「観頤荘図」に描かれた広大な別荘はどこに消えたのであろうか。

再度、藩主の年譜を拾ってみる。『吉茂公御年譜』の宝永4年（1707）2月晦日の条に、「西御屋敷内ヲ左ノ人数へ拝領サセラル」として、枝吉利佐衛門ら8名の名前が記されている。従つて綱茂の死後、吉茂の代になって観頤荘は聖堂を残して解体されたと推定され、それが元文五年の「御城下絵図」に表われたと考えられる。しかし宝永5年の年譜にも「西御屋敷」の名称が用いられていることから、拝領された後、すぐに無くなつたわけではないようである。そして元文五年の「御城下絵図」に見られる不規則な水路と大きな池は観頤荘のなごりではないかと推定される。また『吉茂公御年譜』附録に、「綱茂公御代、西屋敷御取立ノ節、水月庵ハ精町ヘ引移サル」とあり、「承応三年佐嘉城廻之絵図」で宝琳院の西隣に描かれている水月庵が西屋敷建設のために移転されたことが分かる。さらに吉茂の代の宝永年中にこの水月庵のあった場所に慈眼院が建立されている。これは元文五年の「御城下絵図」に慈眼院の名が見られることからもわかる。

「観頤荘図」を見ると敷地は宝琳院を囲むように西にも南にもいくらか広がってはいるが、ほぼこの付近が東端、南端であり、北端は佐賀城の南濠までであろうと推定される。西端は決定できる要素が無く推測するしかないが、「観頤荘図」の各施設の配置や現在の水路などから佐賀大学のキャンパスの東南部が含まれると思われる。（ただし旧制佐賀高等学校が建設された時に大規模に整地されたらしく、かつての姿を想起するのは困難である）

ともかく、観頤荘は現在の鬼丸町の通称鬼丸小路の西側から佐賀大学の東南部にかけての一帯と推定でき、その広さを計ると約15～20万m²であることが分かる。（図-1参照）

3. 大名庭園としての観頤荘

江戸時代は空前の造園ブームでもあった。諸大名は領国の城屋敷はもとより、江戸の上・

中・下の屋敷に庭を築いた。水戸偕楽園や兼六園、栗林公園などの著名な庭園も江戸時代に作られた。大名庭園は、白幡洋三郎氏が『大名庭園』（1997年）で述べているように、「社交」と「儀式」の装置であったという。さらに将軍を招いて遊興の宴を催し、また遊事のための別邸であっても政事も行われた。政事も遊事も含み込んだ庭園が城下町の大名庭園の特徴であった。尾張藩江戸下屋敷「戸山荘」も江戸市中に知れ渡った大名庭園であった。現在は残されていないが、敷地面積約45万m²で広大な回遊式庭園であった。残された道中記仕立ての『尾張公別荘道図』が往時の姿を今に伝えている。その中に東海道を模した街道筋の宿場町を作っていた。この街道筋にはいくつもの店が並び、町人をまねて買物をしたり、茶店で休んだりして侍たちが楽しんだという話も残っている。こうなれば今のテーマ・パークのようなものである。

観頤荘はというと、『綱茂公御年譜』によると、元禄14年（1701）には家臣たち総勢130人余を集めて、庭や芝居を見ている。酒が振るまわれての饗宴であった。また元禄15年（1702）には親類や家老たちを集めて、台風で領内に大きな被害が出たことへの対応を協議し、税の免除を指示している。さらに宝永2年（1705）には自分の妹で諫早家に嫁いだ初やその子供などを招いて花見を催し、自身も詩歌を詠じている。綱茂の作った観頤荘は元禄13年（1700）から宝永4年（1707）までの短期間であったが、大名庭園としての役割を十分に果たしたように思われる。

おわりに

本稿では観頤荘の位置や規模などを中心に考察してきた。そのため触れられなかった点も多い。特に「観頤荘図」に描かれた各施設の詳細についてはほとんど検討出来なかつた。そのひとつに「聖堂」の建物の横に、的が付けられた射場が描かれていることである。これについて『吉茂公御年譜』の宝永5年の条に「四月、御石火矢方稽古人、六月廿二日ヨリ西御屋敷ニ於テ稽古仕ルヘキ旨、大筒ハ牛島天神社ノ裏、以前ノ御前射場ニテ打候様仰付フル」とあり、これが「観頤荘図」に描かれた射場であろうか。このことを含めて今後の課題としたい。

（学芸員 宇治 章）

エッセイ

「日本の古墳—僕が調べた歴史の謎—」展を終えて

1.はじめに

平成10年2月19日から3月20日までの26日間、平成9年度の佐賀県立博物館企画展として標記の展覧会を実施した。会期中県内外から訪れた観覧者からさまざまなお想などもお寄せいただいたので、今後の糧とすべく反省の記を記しておきたい。

当館の企画展には佐賀に関わりの深いテーマを掘り下げて、全国へ向けて情報発信する学究タイプの展覧会と全国的・普遍的なテーマを佐賀県民に広く紹介・普及することを意図する啓発型の展覧会があるが、この展覧会は後者に属するものである。

考古部門では平成5年2月～3月にやはり後者の立場で「弥生のロマン—倭人の原像—」展を実施したが、今回の企画はいわばその続編でもある。

取り上げたテーマは古墳であるが、この古墳自体の消長と、特にその副葬品の組合せの変化にスポットをあて、そこに埋葬された首長の性格の変貌から古代国家の形成過程を理解していくだこうというのが最終的な目標であった。

2.企画・展示の狙い

上記の目標を達成するためには、まずとかく解説が難しくなりがちなこの種の展覧会の悪弊を排する必要がある。そのため今回は展覧会そのものを佐賀県内に住むある中学2年生の研究発表と仮想することにした。展示構成は以下のとおりである。

I. 古墳ってなあに？

II. 古墳誕生の謎

III. ヤマト王権の確立

フロア展示1. 古墳をつくる

フロア展示2. 英雄かく眠る

IV. 巨大古墳と倭の五王

フロア展示3. 増輪の森

フロア展示4. 探検！横穴式石室

V. 古代国家への道

フロア展示5. 手に取って調べよう！—須恵器—

VI. 古墳から火葬墓へ

I～VIの6項目が時間軸に沿った基本的なストーリーであり、展示室の周壁に設けられた固定のガラスケースを使用した。それに対して1～5のフロア展示は文字通り展示室中央のフロアを利用した、いわばコラム的なテーマ展示である。

展示資料の選定にあたっては、●評価が定まった代表的資料（教科書に登場するような資料）であること、●理解の助けとなるような模型・復元品をできるだけ多用すること、●体験型学習の導入を図ること、の3点を特に留意した。こうして選定された出品資料は総数395件1170点であり、その内には国宝18件38点・重要文化財102件320点を含んでいる。

また、会場に掲示する解説パネルの原稿は通常図録用の原稿と兼用することが多いが、今回は両者を区別して、会場用のものは要点のみを箇条書きで、より平易に表現し、キャプションの資料名についてはすべての漢字にルビを付した。展示品を出土した古墳の形や大きさなども一見して理解でき、相互の比較が容易なように縮尺100分の1を原則とする古墳平面形パネルを壁面に掲示した。

さらに展示の概要を最初に把握しやすいように10分ほどのガイダンスピデオを会場内に入つてすぐのところで放映した。

3. 観覧者の反応

観覧者総数5761人の内訳は一般成人57.1%、大学生1.2%、高校生6.7%、中学生10.3%、小学生24.7%であったが、その年齢・興味に応じて反



会場入口（案内役の「夢丘太郎君」が出迎える）

応が多様である事は言うまでもない。一般的観覧者は奈良県黒塚古墳の発見などで折から話題となっていた三角縁神獣鏡や国宝の馬具類など、個々の原品資料の美術工芸的側面に強い関心を示す傾向が見られたが、古墳の定義など解説パネルの内容に関する質疑も多く、専門的な関心の高さも窺われた。演示手法の点ではコーナーごとに色分けした古墳平面形パネルが目新しいものとして評価いただいた反面、縮尺の異なるものについて、その表示が分かりにくいとの指摘を度々いただいた。また一般成人では高齢になるほどガイダンスビデオの視聴率が高いように思われた。これはソファーの設置とも関係であろう。ガイダンスビデオも男子中学生が女子中学生と対話する形式をとったため、小学生・中学生にはかなり親近感を与えたようであり、ガイダンス効果は高かったと評価している。

小・中学生に最も人気があったのは、やはり体験型の展示として試みた「探検！横穴式石室」のコーナーと「手に取って調べよう！－須恵器－」のコーナーであった。前者は会場内の奥まった一角を利用して実大の横穴式石室を発泡スチロールなどで復元し、照明を落とした内部に自由に入ってもらおうというものであるが、普段馴染みのないこの種の構造物を実感するには好適なものであったと考えている。耐久性に不安もあったが、引率教師の方々の協力などもあり、何とか最後まで持ったのは幸いであった。一方後者は、観覧者が実物資料を直接手に取ることができる、従来の展示にはなかった試みであり、これは小・中学生に限らず一般にも好評であつ

た。準備不足でコンパニオンの事前教育など行き届かなかった面もあるが、危惧された資料の破損などもなく、成功であったと言えよう。

代表的資料の展示を目指したためにレプリカの比率が高くなった点を案じていたが、この点について不満の声はあまり耳にしなかった。昨今のレプリカの普及により、その展示資料としての価値について一般の理解も進んでいるようと思われる。

その他、フロア展示を多くしたために本来の導線を逆行する観覧者が見られた点が反省される。

4. 今後の課題

残された課題は多いが、何と言っても観覧者数はさらに増加を図る必要がある。特に主たる対象と考えた小・中学生が2000人程度と少なかつことは大いに反省しなければならない。事前PRの不足もあるが、開催時期の問題も再検討してみる必要がありそうである。小・中学生の当該単元の学習時期からすれば5~6月頃に計画するのが最も効果的であったかも知れない。今後学校教育との連携も密にする必要がある。そのためのアイテムとして博物館常設展で導入した小学生用ワークシートなども効果的であろう。

観賞を主体とする美術部門の展示と異なり、歴史・民俗・自然史などの展示ではさまざまなレベルでの「学習」に効果的に対応する必要がある。そのような意味では、今回の展示は「分かりやすい展示」と「見応えのある展示」の狭間で、消化不良を起こさせたのではないかと反省する次第である。

(資料係長 蒲原宏行)



復元横穴式石室内部の見学



「手に取って調べよう！－須恵器－」のコーナー

常設展案内

博物館・美術館新収蔵品展から

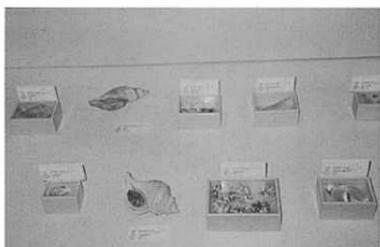
会期：5月4日～5月31日

佐賀県立博物館・佐賀県立美術館では自然史・考古・歴史・美術・工芸・民俗の各分野において、日頃から資料の調査、研究、収集、公開に努めている。

この企画は、そうした成果として、平成9年度に購入・寄贈・寄託等によって収集した新収蔵品を一堂に展示・紹介するもので、当館の資料収集の最新状況を知っていただく絶好の機会であった。自然史1件、考古4件、歴史1件、美術9件、工芸65件にわたり、大変にバラエティに富んだ内容であった。

以下、展示了80件（366点）の資料のなかから代表的なものを紹介する。

貴重な資料を御寄贈、御寄託いただいた皆様に心からお礼を申し上げます。



貝類標本

松尾仁志氏寄贈

県内の貝類収集家の松尾仁志氏による106種249点に及ぶコレクションである。暖海の浅海でみられる貝類を中心としているが、一部に陸・淡水産の貝類等を含んでいる。主な採集地は熊本県牛深、大分県蒲江、鹿児島県屋久島・奄美大島、沖縄県宮古島・久米島などであるが、海外のものもある。

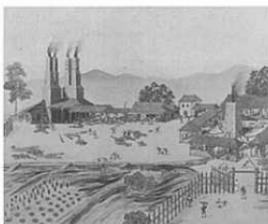
同氏の寄贈は今回2回目で、前回の寄贈分を含めると204種455点になる。



連弧文「昭明」銘鏡 中国・前漢時代

東脊振村教育委員会寄託

平成7年1月、東脊振村石動四本松遺跡の弥生時代壺棺墓より発見された銅鏡である。漢字の銘文を鏡背の主文様とするいわゆる銘帶鏡の一例で、中国前漢時代末期（紀元前一世紀末～紀元一世紀初）の作品である。銘文は「内而青而以面昭而明而光而象而日而月而夫」の19字からなり、「昭」「明」の2字を含むことから「昭明」銘鏡と呼ばれる。直径12.6cmとの種の鏡では最大級で、鋳上がりも良好であるが鉢を欠失する。



築地反射炉絵図（複製）

原資料：鍋島報效会

嘉永3年（1850）、佐賀城西北の築地（現在の日新小学校付近）に設置された佐賀藩の大銃製造所（大砲の製造所）の絵。画面の左奥に反射炉が見える。この設備を用いて佐賀藩は日本初の鉄製大砲の铸造に成功した。

原資料は昭和初年に陣内松齋が描いたもので、当館に寄託されているが、劣化の恐れがあり長期の展示が難しいため、展示用の複製を製作した。



「少女読書」 岡田三郎助 大正13年（1924）
購入

岡田三郎助（1869～1939）は、現在の佐賀市八幡小路に生まれ、旧藩主の庇護を受けて西洋画（油絵）を学んだ。明治洋画壇を代表する「白馬会」創設に参加、東京美術学校西洋画科の助教授から、フランス留学を経て教授に就任、昭和12年には第1回文化勲章を受賞した。

この「少女読書」は、明るい陽光を浴びて読書に没頭する少女（岡田家の縁故者といわれる）を、色彩豊かに描いた佳作である。



紺糸威桶側二枚胴具足 江戸時代

飯盛泰晴氏寄贈

多久市の古美術収集家の飯盛泰晴氏から、刀剣、陶器など多数の寄贈を受けた。

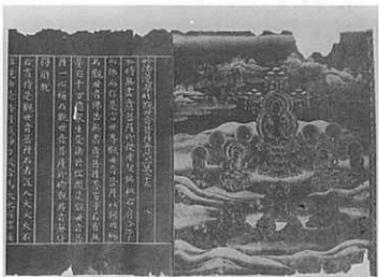
この具足は胸に翫葉紋があることから、鍋島家関係の人物が着用したことが確認される。

寄贈された刀剣・甲冑類は15件を数え、江藤新平が所持していたといわれる吉包の刀や三代忠吉、忠清、兼廣、宗次などの肥前刀を含む優れたコレクションである。



染付日輪山水帆船文皿 有田焼 17世紀前半
飯盛泰晴氏寄贈

一般的に初期伊万里と呼ばれる中皿（七寸）で、見込みに染付で山水文が描かれている。初期伊万里は中国・明末の景德鎮窯などの影響を受け、その文様の類似性がよく知られている。この山水文も、そびえ立つ岩山に樹木、質素な庵、群れをなして飛ぶ雁など、この種の皿に典型的な文様を略筆ながら軽妙なタッチで描き込む。遠景として描かれた空に浮いたような帆船の表現がなんとも不思議である。裏面は無文で、高台径は小さい。



法華経 平安時代

高伝寺寄託

紺色に染めた紙に金泥で写経した紺紙金字経。見返し絵は枳迦説法図などを金銀泥で描いていて、武士が台頭した平安後期らしく、大鎧を身に付けた武者など珍しいモチーフもみられる。

箱書から、初代佐賀藩主鍋島勝茂が高伝寺に寄進したことが知られる。全八巻のうち巻五は欠本、巻四是同時代の別本である。

行事案内

平成10年度佐賀県立博物館企画展

有明海博物誌

平成11年2月6日（土）～3月7日（日）

美術館2～4号展示室

大人620円（510円） 大学生300円（200円）

*高校生以下無料、（ ）は20名以上の団体料金

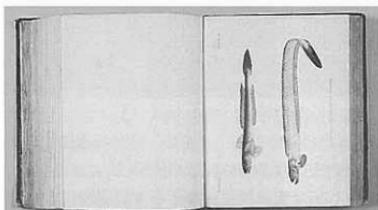
最後の氷期が終わり、海水面が上昇することで、日本が大陸から列島として分離しのは約8千年前。それは、有明海や佐賀平野の原形が生まれた時期でもありました。以後、海退と干拓が進む中、佐賀平野はしだいにその面積を広げますが、まさにこの陸化の歴史が、佐賀平野特有の歴史と風土を育んできたと言えます。

この企画展では、ムツゴロウなど有明海特有の魚たちを生態（水槽）展示する他、有明海にまつわる国内の資料はもちろん、海外で刊行された魚類図鑑や海外の民族資料などをあわせて展示し、有明海と人々の交流を幅広く紹介。

いよいよ期間限定で、「有明海博物館」がオープンします。

展示点数 約150点。

- I 「有明海文化」誕生の理由
- II 有明海と民家の意外な関係
- III 有明海が生んだ農具
- IV 農具と漁撈具の親しい関係
- V 世界に広がる漁撈具の輪
- VI 有明海大図鑑
- VII 有明海大航海時代
- VIII 祈り—海・川・堀・平野—



日本動物誌（魚類篇／オランダ初版本）よりハセクチとワラスボ 1833～1850年 福岡県立図書館

佐賀県立博物館・美術館報 第121号

編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀市城内1-15-23 TEL0952-24-3947 FAX0952-25-7006

印 刷 (有)弘文社印刷

常設展

◇葉隠武士の装いーかたなとよろいー

平成10年12月4日（金）～12月20日（日）

美術館2号展示室

初代忠吉をはじめとする肥前刀約30口と鍋島家のお抱え甲冑師宮田勝貞の作品などに葉隠武士の美意識をさぐります。

主な展示資料

- ・刀（初代忠吉 慶長五年） 個人蔵
- ・脇差（初代忠吉） 永松隆俊氏寄贈
- ・刀（吉包 伝江藤新平佩刀）飯盛康晴氏寄贈
- ・濤・日輪文打出具足（宮田勝貞） 館蔵

◇草場佩川一竹図を中心にー

平成11年3月12日（金）～

美術館2号展示室

肥前多久出身の幕末の儒学者で、絵画にも巧みであった草場佩川の作品を、屏風などの大作を中心に展示します。

主な展示資料

- ・群竹図屏風 個人蔵
- ・鳥菜図屏風 館蔵
- ・朱子像 個人蔵

◇唐津・伊万里の壺・甕・瓶

平成10年10月13日（火）～11月23日（月）

博物館3号展示室

◇高麗仏画の名品—特別陳列 楊柳観音像ー

平成10年11月25日（水）～平成11年1月10日（日）

博物館3号展示室

◇北部九州の経筒造宝—中世のいのりー

平成11年1月12日（火）～2月21日（日）

博物館3号展示室

◇藩主の肖像

平成11年2月23日（火）～4月4日（日）

博物館3号展示室